

研究テーマ：音読（筆写）で楽しみながら力をつけよう  
発音に抵抗をなくしよう

所属 高知北高校通信制  
氏名 吉岡 恭子  
R G SH3

### 1 研究の背景

北高校通信制の英語授業（スクーリング）は年間わずか20回、担当の英語は、年間必要時間数が12時間で、13名の生徒の平均出席数は3名と少ない。生徒の実態は英語に興味関心があり、意欲もみられ、授業態度もまじめで声もよく出る。なかには予習をしてくる生徒もいる。しかし、アンケートより発音が苦手であることが分かる。音読（筆写）により、少ない授業（スクーリング）を楽しく元気に、やる気がさらに増すものにし、また、学習効果を上げると同時に自学自習できる力を養うため、授業とレポートを創意工夫し、生徒の教科書・学習書にもプラスできるものにしたい。

### 2 リサーチクエスション

「音読における発音指導の工夫」

スクーリングでシャドウイングと音読筆写を続けて行えば、発音に抵抗がなくなる。

### 3 予備調査

#### \* 予備調査1 授業（7/6,9）観察の結果

- ・シャドウイング：週1回のスクーリングでリズムを取り戻すのは難しい。
- ・音読筆写における内容推理：予習している生徒は内容を覚えている。発表の際、互いに刺激を得るのがよい。

内容把握：予習をしていない生徒やヒアリングの苦手な生徒にとって、単語1語がなかなか出てこないこともあるが、ヒントや他の生徒との協働で内容理解へ結び付けていくことができる。予習をしている生徒は単語ではなく英文として出てくる。

#### 評価（聞き取り）

発音についてまだ十分に意思表示できるまでにいたっておらず、今後継続して指導する必要性を痛感した。

#### \* 予備調査2 英語力を示すデータ

英語 夏季試験 6月22日（日）～7月14日（月）

レポートから出題の発音、単語、文法・構文の中で、生徒自身苦手意識がある発音問題の正答率（77.1%）が一番低かった。

#### \* 予備調査3 アンケート、授業評価の結果（5/25）

同じアンケートでも生徒の学力などの実態により授業評価が異なり、一人ひとりのつまずきが見え、一斉授業での生徒との関わりを考える鍵になった。

### 4 仮説の設定

音読だけでは成果が目に見えないので、筆写を同時にトレーニングすれば、発音だけでなくより英語力がつき効果的であろう。

仮説1 音読練習を続ければ、発音の苦手意識を克服するために効果的であろう。

仮説2 音読筆写語数を記録し、継続して練習すれば成果を実感できるであろう。

仮説3 音読筆写を授業だけでなくレポート（課題）でも取り組めば、生徒自身が自分のペースで学び自学自習の枠がおおいに広がるだろう。

## 5 計画の実践

### 仮説1について

\*シャドウイング はじめての生徒もいたが基本的な取り組みの姿勢ができていたので興味を示し、徐々にスピード、音量等が備わってきた。

\*発音評価表 最初は単語の発音や区切りに重点を置き、回を重ねリズム・イントネーションや音量等も加える。生徒同士の相互評価(よかったところ・こうすればもっとよくなる)も取り入れる。

### 仮説2について

トレーニング記録帳や音読筆写の進歩記録表を使い試みた。1分間の限られた作業時間だが、緊張しながらも五感をフルに使い、集中して取り組んだ。語数は19から29と決して多くはないが、継続すれば必ず成果が現れると確信する。

### 仮説3について

2学期のレポート(課題)6回目から組み込む。(但し、機械的では学習がおもしろくないので、各自、レッスンの「お気に入り文」を選び、自分の考えもコメントできるものにした。

## 6 実践の結果

英語 音読筆写 語数/1分 (D、Hは夏季試験後無資格、空白はレポート未着)

	レポート6		レポート7		レポート8		レポート9	
	音読	音読筆写	音読	音読筆写	音読	音読筆写	音読	音読筆写
A	113	26	180	34				
B	160	37						
C	100	32	108	36	120	40		
E	180	30	180	54				
F	103	18	140	25				
G	120	32						

## 7 結果の検証

音読筆写 レポート6、7

\*音読 生徒A 113/分 180/分

\*音読筆写 生徒F 18/分 25/分

上記はそれぞれの最高値であるが、他の生徒も回を重ねれば語数が増え成果が上がることを証明している。

## 8 成果と今後の課題

少ない授業の中で効果が期待でき、生徒自身も成果を実感し易いのではないかと始めた音読である。1学期、音読を奨める中で、「家で読んできた」とか、授業の音読筆写で「勉強になった」、「口と手の速さがバラバラになったり、2つの単語が1つになったりしたけれど、楽しかった」と生徒たちの反応はよかった。また、12月のアンケートからは、「こんなに声を出した授業は初めて」、「音読筆写は初めてだったが、声に出して読むことによって、すごく発音の練習になった」、「音読の時間をもっと増やしてもいい」、「音読はこれからも続けたい」とあった。少ないスクーリング時間に囚われている私にとって、生徒のアンケートが語る、「授業で音読をやって、レポートで単語、内容、文法等を深めたいと思う」は生徒の角度から見た示唆的助言である。秋期試験のデータで、発音が91.0%と正答率が一番高くなっていたことも嬉しい。

生徒の実態に合った系統的年間計画、集計・分析まで視点に入れたトレーニング記録帳や音読筆写の進歩記録表の工夫等まだ課題は多いが、この一年間の取り組みで、生徒たちが『やればできる』、『努力すれば力がつく』ことを少しは実感できたかと思う。来年のクラスを楽しみに準備を進めたい。